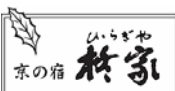


# 国際京都学だより

第十号 二〇〇九年（平成二十一年）十一月一日（日）



編集 国際京都学協会事務局  
〒六〇四八三八三 京都市中京区西ノ京小堀町二五三  
ホームページ <http://www.kyotogaku.org/>  
Eメール [info@kyotogaku.org](mailto:info@kyotogaku.org)

発行 国際京都学協会

題字は書家・杭追柏樹（くいせこはくじゆ）氏

## 京都とベルギー 中村順一（国際京都学協会 副理事長）

ベルギーは、一八三〇年の建国まで、数え方にもよるが、六回も異なる外国の支配下、保護下に置かれた。このように変化に富む歴史を有しながら、国の到る処に古い遺跡が大切に保存されている。ローマ時代に始まり、ロマネスク、ゴシック、ルネッサンス、バロック、アール・ヌーボーに到るまで、建造物も多彩である。世紀・時代の異なる史跡が一つの街・路地に並存している点は京都によく似ている。

四方をフランス、ドイツ、オランダ、英国（海底トンネルで地続きとなった）に囲まれながら、ベルギーは国全体が安らぎと寛ぎを感じさせてくれる。ブルージュは中世がそのまま現代に生きている街並みと云われ、ブリュッセルはヨーロッパで最も緑の多い首都と云われる。京都も、自然と歴史と生活が三位一体となって、憩いと落ち着きが感じられる都市である。ともすれば無味乾燥になりがちの都会生活と違って、リラククスした住み易い環境を提供してくれる。

ベルギーの人々の王室への敬愛の念は強く、「王室と緊密な皇室のある国」というのが日本への親近感の要因となっている。カトリックが大宗を占め貴族制度が存続すると同時に、組合運動が早くから発達し時代の先端を先取りする斬新な発想も根強い。京都もベルギーも、歴史と伝統が脈々と息吹いている中で、革新、進歩、発展が内から生まれるという貴重な土壌を有しているように思われる。

ベルギーでは、毎日のように何処かで「祭行列」がみられる。その多くは、街の目抜き通りや広場を列をなして行進するもので、地元の人々が支え参加する地元の「祭」であり、京都の祇園祭や葵祭とも共通するところが多い。祇園祭の山鉦巡行で、函谷鉦、鶏鉦、鯉山、白楽天山の四山鉦に十六世紀にベルギーで織られたタピストリーないしそのレプリカが飾られていることも興味深い。

ベルギーの国内政治の仕組みは独特かつ複雑である。三つの地域政府と三つの共同体政府が入り組み、連邦政府も含めて権限配分が行われている。異なる要素をよく調整し調和させながらベルジャン・プラグマティズムがうまく機能している。京都は古くから国際交流の拠点となっており、異文化への対応も寛容である。また、世界有数の宗教都市でもある。二十一世紀は、文明間の対話、宗教間の対話が極めて重要になると思われるが、その面での京都の役割と京都への期待は大きい。

ベルギーに居ると、「国際」という言葉は殆ど聞かれない。日常生活そのものがそのまま国際的であるからである。オランダ語、フランス語、ドイツ語の三つの公用語に英語が加わって、会話でも会議でも、通訳なしにどんどん話が進む。ベルギー人をみると正に典型的な国際人という気がする。この点はベルギーと京都では状況がかなり違うと思うが、京都に対する国際的な関心と期待の高まりを考えると、京都から世界への発信が大きく進展することが望まれてならない。京都の前に三年ほど住んでいたベルギーに想いを馳せ一文をかかせていただいた。

「持続・千年首都 平安京の「コスモロジー」と東山修験道」

鎌田 東 二（京都大学心の未来研究センター教授）

京都大学に新設された「こころの未来研究センター」教授に着任されて  
まもない鎌田先生にお話をうかがった。

開口一番、「ホラ」を吹きますと言って立派な法螺貝を取り出して朗々と吹き放たれたので一同すっかり度肝を抜かれてしまった。いつも講演の冒頭にはこうして会場を清め、列席者全員健康と幸せを祈るとのことだった。神主の資格も持っているが、フリーランス神主であり、神道ソングライターでもあつて、神仏混合の緩やかな神道だという。毎朝、比叡山に向かい祝詞を唱え、般若心経を唱え、石の笛や横笛を吹くのが日課だそうです。

京都に赴任して、まず疑問をもったのは「平安京はどうして延暦十三（七九四）年から慶応四（一八六八）年まで一千年以上も長い間都たりえたのか」ということだった。そして平安京が長寿であった秘密は生態系にもとづいた一つの知恵、「生態智」にあったのだという仮説を立てた。それを構成する要素として、以下の四つの特性を挙げられた。

第一は「水の都」。東の賀茂川、西の桂川を両サイドにもち、さらに地下にも地上にも豊富な水系を張りめぐらし、平安京のライフラインの基盤となった。東山を歩いてみても、植生の豊潤さ、森の湿り気、湧き出てくる水の豊富さに気がつき、この生態系のなからにじみ出てくる水が京都を支えていることを実感する。

第二は「祈りの都」。皇城鎮護の寺としての比叡山延暦寺や赤山禅院、これは仏教。賀茂川水系には賀茂一族の上賀茂、下賀茂神社。桂川水系には秦一族により松尾神社や広隆寺が建てられた。東南の方には稲荷神社など。そういうような神仏の協働による癒し空間の創出が、平安京の「コスモロジー」のいちばんの骨格を成している。

第三は「ものづくりの都」。保元・平治の乱、応仁の乱などかずかずの戦乱の時代をくぐりぬけ、戦火に焼かれても復活したコミュニティ。それが平安京の維持・継続をなしてきて、高度に洗練されたものづくりを発展させた。その象徴に「禁裏御用達」というものがあり、職人たちが木工品であろうが絹織物であろうが、もつとも洗練されたものを天皇に、あるいは神様に奉納しようとする。そういう意識がかぶさって支えたのが「ものづくり文化」の継承、厚み、蓄積というものであった。

第四は「里山盆地文化」。平安京が周囲の山並みを、マツタケなどの植物を利用し、染色や繊維や陶芸の土や、いろいろなものを生み出す里山につくっていった。さまざまな農業や林業はもちろん、祈りや祭やものづくりと連動させた。

このように、平安京が維持され繁栄してきた物質的基盤、技術的基盤、そして宗教的・精神的基盤を何とか全体としてとらえ、それをこれからの都市づくりに生かしたい。世界平安都市構造というものを世界に向かつて訴えて生きたいとかんがえている。

こころの未来センターでは「こころの観の思想史的・比較文化論的基礎研究（人類はこころをどのようにとらえてきたか？）」など各種のプロジェクトをかかえているが、その一つとして「こころとモノをつなぐワザの研究」を進めている。鎌田さんによれば「モノ学」の最初の起点は大物主という神様の名称を問うことであつた。「モノ」というのが一種の神だ。神を呼び出し、交わり、生命力を強化する技法を「ワザオギ」というように、「ワザ」もさまざまな儀礼・芸術・芸能・技術・学芸・ライフスタイルを含んでいる。モノやワザという言葉には霊性が入り込んでいる。たとえば、吉野の天河大弁財天の秘仏の六十年に一回の開帳に出会ったことがあるが、そのすごい生命の更新とか復活の力に圧倒された。

平安京を維持してきたシステムというものが、そういう部分を組み込んでいる。何十年に一遍の式年遷宮とか、最高のモノを、その時に作ってゆく。最大の生命力をもったものをそこで作る。

演題にかかげた「東山修験道」というのは鎌田さんが開祖となつて新規に提唱されたものであつた。伝統的な狸谷山不動院の真言系修験道や天台系の修験道ではなく、現代的な生態智というものをもう一回認識するような新たな修験道を実践しようと唱えるものだ。東山連峰を「歩行」修行の地として巡り歩くのが日課で、夜の闇の中を歩き、身一つでいかに人間が小さいかということを知るといふことが、先生にとつて修験道の重要なことだそう。

今回の講演には三六ページに及ぶ膨大な資料を用意してくださいと、ゆたかなパフォーマンスと盛りだくさんの話題に圧倒された。京都大学もこれほど有能な人材をよく採用したものだと感じた。今回の話をもっと詳しく知りたい方は、ごく最近に出版された『京都「癒しの道」案内』（共著、朝日選書）をぜひともおすすすめしたい。

（文責 編集部）

講演会・文化交流サロン(二〇〇八年十二月二日弥生会館)

「源氏物語千年紀を終えるにあたって・今想い考えること」

芳賀 徹 (国際京都学協会 理事長)

二〇〇八年も師走に入つて恒例の文化交流サロンが開催されたが、その前に去る十一月一日から四日まで京都国際会館と金剛能楽堂で開かれた「源氏物語国際フォーラム」について理事長から報告がなされた。

初日の式典には天皇皇后両陛下が臨席され、式典後には研究者一同が懇ろなお言葉を賜つたとのこと。フォーラムは三日間にわたり密度の高い研究発表がなされ、その合間には金剛流の能や観世流の『葵上』の上演などもおこなわれた。日本の研究者などの参加者のほか、海外の約二十カ国から二十数名の方々がこられた。

講演の内容は多岐にわたるものであったので、編集部では、おもに外国人の研究者や作家・翻訳家の発表について言及されたことを中心にまとめてみた。

「フォーラムの二日目には三人の基調講演があつたが、まず作家で評論家の竹西寛子さんが『源氏物語』の文章の特徴について、長年にわたつて言葉の隅々まで読んできた方らしい、実に見事ないいお話をしてくださいました。」

「二人目の平川祐弘さんは、一九二六年から六・七年かけてアーサー・ウェイリーが英語に訳したことが、同時代のヨーロッパの文学、特に英文学の世界に与えた影響について詳細に語ってくれました。それまでヨーロッパでは日本文学についてはろくに知らなかったのが、長大な美しい、何とも面白い恋愛小説が、九〇〇年ほど昔に極東の日本で書かれたことにあつてとられた。ちょうど同じ頃プールの『失われし時をもとめて』の英訳も出たことで、両者の比較もよく論じられた。ウェイリー訳は原文をかなり深読みして、登場人物の立ち居振る舞いや心理なども読み抜いて英語に表現しており、優雅な密度の高い文学といえる。」

「三人目のロイヤル・タイラーさんは、オーストラリアの日本文学の正教授であり、アジア文化研究所の所長でもあり、『The Tale of Genji』という英訳を出されました。この訳は一九八〇年のエドワード・サイデンステッカーさんにつづく三番目の英訳になりますが、五四帖を完全に訳したものです。非常によく考えられた翻訳で、登場人物がどのように変容していくか、変容の過程で、どんな違う女性があらわれたり、男性があらわれたりするか。そのあいだに、どのような心理的駆け引きがあつたかを、全部読み取りながら訳したものです。Pride goes before a fall (プライドは失墜の先

を走っている)。驕りのあとには凋落が来るということですが、つまり「おごる者は久しからず」が光源氏のなかにも生きていたという話でした。」

三日から四日にかけては各国からの研究者、翻訳者あるいは詩人たちが、すべて日本語で発表をおこないました。『The Tale of Murasaki』を書いたライザ・ダルビーさんは、祇園で芸子さんの修行もし、お歯黒まで染めた女性です。カリフォルニアの自宅のバルコニーで西の方を見ていたら紫色の雲の上に紫式部が乗っている姿が見え、それに靈感を得て書き出したというエピソードで会場を大いに沸かせました。

トルコから来たエルキンさんはイスラム圏の方ですから、源氏のあんなみだらがましい話を、いったい訳せるかどうか非常に苦労したが、とにかく折り合いをつけて訳していったという話でした。チエコのカレル・フィアラさんは現在、福井県立大学で教えていますが、前に『平家物語』を訳したあと、『源氏物語』のチエコ語訳を終えました。日本の中世文学が専門で、『源氏物語』のなかに特別な一種の不思議な時間の動き方があることを指摘しました。ブルガリアからはクリステワさんが来ておりました。

カナダのモストウさんは、江戸時代に『源氏物語』が『女宝鑑』という婦女教訓に翻案されて、夫や姑にどのように仕えるかという話に転用されたことを語りました。谷崎潤一郎の『細雪』のフィンランド語訳をしたニエミネンさんは、『源氏物語』の中の掛詞、和歌などの訳が難しかったことを具体的に話してくれました。

八年ほど前に『源氏物語』のロシア語訳をだされたタチアナ・デリュシーナさんは、一種の歌物語となつて登場人物たちがお互いに自分の心を歌によつて交換し、それによつて読者にもわかるようになっていくことをうまく話してくれました。オランダのヨス・ヴォスさんは掛詞や枕詞の二重・三重の意味がある面白さをどのようにオランダ語訳するか苦労する中、自分で掛詞をオランダ語訳の中で使ってみましたと例をあげてくれました。

北京の日本学研究センター教授の張龍妹さんは、儒教の縛りがある中国では『源氏物語』に匹敵するような恋愛小説は長く生まれなかった。

『源氏物語』はトルコでもフィンランドでも英語でもフランス語でも訳されて、みんな誰しも感動する、普遍的な価値を持つ大文学であることが、今回のシンポジウムではっきりわかってきたわけです。」

四日間のフォーラムを終えたあと感じたこととして、芳賀理事長がつぎのような見解をのべられたが、これも大変興味深いものだった。

「一千年まえに、日本のこの京都で『源氏物語』が成立したのはまったく一つの奇跡だ。紫式部という女性を支えたのは宮廷である。恋愛が大つぱら

に許されて、それが人間の本来の姿である。神話以来、その確信が根付いている文弱の国、愛の王国。それが日本であるというふうに考える、平安時代の貴族の男女のあいだで才能を競い合っている。あれを再現すると日本はほんとうの文化国家になる。」

「もうひとつ感じたのは、『源氏物語』が古典として尊重されてきたという一千年の歴史。鎌倉時代には『源氏物語』の読み方について種々の研究が開始される。室町から南北朝には、『源氏物語』が武将たちの基本的な教養として公家から伝授されてゆく。しかも和歌が根本の教養で、和歌を通して自然との付き合い方、生や死に対する見方を学び、この世がはかないものであること、ものあわれの世界を学んでゆく。そういう教えが『源氏物語』に凝縮されて入っている。」

さらに江戸になると、武家まで伝わった『源氏物語』の教養が市民たちに広まってゆく。絵巻や屏風、さらに扇子に描かれる。『源氏物語』の有名な情景が、いくつも、何通りにも描かれて江戸期をとうして市民の初歩的教養になっていった。そのうちに『偽紫田舎源氏』など『源氏物語』のポピュラーバージョンもできてくる。」

「明治にはいると男の時代なので沈滞し、女の文学で与謝野晶子などは九つか十で写本を夢中になつて呼んだという。日本という国は文化水準が低落したようだ。政治家なども『源氏物語』を読むべきだ。「源氏読まざれば歌人でない」と言いましたが、『源氏物語』を読まざるものは日本人にあらず。今回の国際フォーラムであらためて思つた次第です。」

講演の最後に『源氏物語』が読まれて千年という記念式典を開催した十一月一日を、日本だけでなく世界の古典に親しむ「古典の日」とするという宣言をしたことを紹介された。

講演会にひきつづき席をかえて懇親交流会が盛大に開催された。その場では芳賀理事長の指名で参加者全員が「古典の日」についての考えを短くのべることになった。それぞれが専門の立場や日頃の関心分野にひきつけられたユニークな意見を披露し合つて会場は盛り上がり、楽しい一夜を過ごすことができた。

なお、二〇〇九年の秋には事業の推進がみられ、来る一〇月三十一日の「古典の日記念シンポジウム」と、十一月一日の「古典の日推進フォーラム」の開催が実現する。芳賀理事長も「古典をいただき古典に抱かれて」と題するパネルディスカッションに参加される予定である。

(文責 編集部)

## 【古典の日催し紹介】

### 古典の日記念シンポジウム

「やまとごころ やまとうた」生活の中の古典」

日時：二〇〇九年十月三十一日(土) 午後二時～四時半

場所：京都会館 会議場

○古今和歌集より「披講」(協力 冷泉家時雨亭文庫)  
○鼎談「やまとごころ やまとうた」生活の中の古典」

○いまどきの古今表現

### 古典の日推進フォーラム二〇〇九

日時：二〇〇九年十一月一日(日) 午後二時～四時半

場所：京都会館 会議場

○筑前琵琶演奏

○講演 児玉 清「書棚の向こうに世界が見える」

○パネルディスカッション「古典をいただき古典に抱かれて」

芳賀徹、冷泉貴実子、金剛永謹、松井今朝子、ザイラー夫妻ほか  
○ヴァイオリンソロ演奏 玉井菜採など

## 【各大学の京都学】

近年、京都の各大学で「京都学」への取り組みがさかんになっている。国際京都学協会も参考にするのが多々ありそうなので、今後は折に触れてその動向を紹介してゆきたい。会員のなかに各大学でこの種の企画に係っている方があれば事務局に寄稿をお待ちしている。

### ○公開シンポジウム

「古都のイメージ大解剖……川端康成の『古都』を手がかりに」

日時：二〇〇九年十一月三日(火) 午後一～五時(入場無料)

会場：京都府立大学 学生会館二階多目的ホール

プログラムには「イントロダクション」「古都」に見る京都のイメージや「外から見た『古都』——日本文化のガイドブック」のほか、京都府立植物園園長の『古都』の花と木——京都らしさを演出する植物たち」など興味深い話題に富んでいる。

## 【新刊案内】

上田正昭『東アジアのなかの日本』

(思文閣出版)(一〇月刊行予定)

日本列島の歴史や文化の実像をよりあざやかにするために、海を媒介とするアジアとのかわり、とりわけ東アジアとの関係をテーマにした最新の一書。これには、「東アジアのなかの京都盆地」や「嵯峨野と秦氏」などの一文がおさめられているというから書店に並ぶのが楽しみである。

